
怪談・痩せてゆく事

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪談・痩せてゆく事

【Nコード】

N0265E

【作者名】

tensuke

【あらすじ】

俳優である「僕」がロケの地で出逢った不思議な青年彼と過ごす時間の分だけ「僕」は痩せてゆく「僕」と「彼」の濃密な時間のお話です

千の星空の下で（前書き）

例によって某俳優さんをモデルに書いております

が どうぞお好きな方に脳内変換して頂けたら幸いです 最期まで
お付き合い下さい

千の星空の下で

1・怪談「牡丹灯籠」

随分痩せたんじゃないか そんな事を会う人ごとに言われる役作りですから 体調は問題ないです

もとから好き嫌いは多かったですし

食べられるモノを食べてます

ちゃんと食べてます 心配ないです

いくら言っても人は納得してくれない

本当の事を言ったら

きっともつと信じてはくれないだろう

ドラマじゃあるまいし そう言って笑われるのがオチだろう

鏡の中の自分を見つめてみても

それ程ひどく痩せこけた男の顔には見えない

むしろ どこか清々しくすっきりと拘りのない顔に見える

これが俺じゃないのか？

人からは違つて見えているのだろうか？

自分だけが鹿の姿に見えたドラマは終わった

なのに

自分の顔が人からどう見られているのかよく判らなくなってしまった
さすがに鹿には見えてはいないだろうが

そんなにも痛々しく痩せこけて病気にでもなりそうな

そんな顔に見えているのだろうか？

写真に撮られた自分

テレビで放送されたビデオに映る自分

どれを見ても鏡で見る通りの顔に見える

健康で元気で申し分なく気分の良い自分の顔だ

それなのに

誰もが口を揃えて言う

心配な位 病的な痩せ方だ 顔だって変わってしまったじゃないかと

怪談「牡丹灯籠」というお話をご存じだろうか？

美しい亡霊に魅入られた侍が 亡霊とは知らずに逢瀬に通い詰め段々に周囲の者が心配する程にやせ細ってゆく

このままでは死んでしまうのではないかと心配した友人が陰陽師に相談をする

事情を知った陰陽師がまじないと厄除けの札をくれる

札に守られ侍は哀れに訴える美しい亡霊から逃れようとする

一晚 決して札で守られた結界から出てはならない

夜明けまで結界の中で我慢出来れば 亡霊を退治する事ができる

そう言い聞かせられた侍は ようやく美しい亡霊の恐ろしさを知り言われた通りに結界の中で一夜を過ごそうとする

しかし 結局

亡霊の力で見せられた二セモノの朝日に誘われて

札の守る結界から出た侍は亡霊に取り殺されてしまう

美しい亡霊に連れられて黄泉の世界に旅立つ侍の魂

悲恋か恐ろしい怪談か 解釈のわかれるところだと思う

そう

もしかしたら自分に起こっている事は牡丹灯籠と同じなのかもしれない

いつか取り憑かれた何かにあちら側の世界に連れてゆかれて

しまうのかもしれない そんな事が今起きているのかもしれない

それでもいい

そんな風に思う

今 自分は何も不自由もなく不幸せでもない

美しい亡霊に魅入られた侍と同じに 幸せでならないのだから
はじめてあの人にあつたのは そう
あれは 寒い夜だった

その2

2・四谷怪談

あれは寒い夜だった

長引いた撮影が終わったのは 日付もかわろうかという時刻だった
現場で解散の号令がかけられ 俳優たちは宿舎へと引き上げた
用意された車に乗り込もうとした時
見上げた夜空に無数の星が煌めいている事に気がついた
普段 東京にいたら目にする事のできない星空だった

さして遠くもない宿まで 美しい星空を眺めて歩きたいと思った
だから 他のスタッフたちに断って 歩いて宿へ戻る事にした
昼間 通い慣れた道だった
だから いくら街灯の少ない郊外とはいえ
大の大人が迷子になるような場所ではない
そう 思っていた

しかし

歩き始めて10分程が過ぎた頃から
あたりの景色が記憶にあるものと同じにも重ならないような
どこか居心地の悪い心持ちになってきた
星空ばかり見上げて歩いていたら
どこかで曲がり角を間違えてしまったのだろうか
立ち止まり 辺りを見回した時 その違和感は一層強いものになった

戻った方がいいのかもしれない
元来た方向へと戻りかけた時 背後で人の気配を感じ
よかったこれで正しい道のりを確認できる
そんな想いで振り向いた

それは 一人の青年だった

「どうか されましたか？」 かけられた声は耳に甘く

冷え冷えとした冷たい空気を凜と震わせるものだった

「はい 宿へもどる途中 道を誤ってしまったようです」

「それはお困りでしょう よろしければご案内致しましょう」

柔らかく微笑んだ青年は 促すように手のひらを見せた

誘われるように青年の後について歩き始めた

不思議と何の疑いも迷いも浮かばなかった

千の星降る夜空の下 二人の吐く息が白く凍った

漂う白い吐息を追うように 青年の背中を追った

どの位歩いただろうか

周囲に見覚えのある建物が現れた

宿が近い事が判る

「ああ・・・助かりました ここまでくればもう大丈夫です
本当にありがとうございます」

深々と頭を下げた自分に青年は優しく微笑んで言った

「いいえ お役にたててよかった お氣をつけて」

去ってゆく青年の後ろ姿を見送りながら

彼が180センチある自分よりもまだ長身であったこと

艶やかな黒髪が烏の羽根のように美しかったこと

長い手足が優雅に動かされていたこと

そして その柔和な微笑みを浮かべた青年が

俳優仲間にもなかなかない程の端正な顔立ちであったこと

耳に残る青年の声がたまらなく官能的だったこと

そう

追い継りたくなった それ程に

魅力的な青年で在ったことに思い至った

「あつ・・・あの 貴方は・・・」

青年の背中に声をかけた

振り向いた青年はにっこりと微笑むとその官能的な声で囁くように
言った

「・・・また お逢いできます」

「・・・え・・・」

そのまま青年は星明かりの中 闇に溶けるように去っていった

その3

3・番町皿屋敷

撮影は決して順調に進んだわけではなかった

京都や奈良の冬は底冷えがする

あまりの寒さに気持ちちが萎えそうになる

立て込んだスケジュールをこなしてゆくには毎日が戦場のようだ
思うようにゆかない天候にも邪魔をされ

その日も終了の声がかかったのは真夜中を過ぎていた

何を期待していたワケでもなかった

ただ 都会を離れたこの場所で 普段見られない星空に誘われただけ
そう

ただそれだけだった

僕はまた送迎の車を断り 歩いて宿への帰途についた
そしてその人影に出逢った

彼だった

「また お逢いしましたね」 微笑む青年の顔が星明かりに白く浮
かぶ

「はい 先日はありがとうございました」

不思議とこの偶然の再会になんの疑問も抱かなかった

「今日もお一人ですか？」

「ええ 終日大勢の人間に取り囲まれておりますので この時間には
一人になりたいと思います」

「それでは 私もお邪魔でしょうね」

「・・・いえ・・・それは」

「ふっ」彼の小さく笑った吐息が白く凍えた

その吐息をもつと間近に感じたいと思う自分がある事にきづき愕然

とした

そんな心を見透かされたように 彼に声をかけられた

「よろしかったら 少しでも一緒に頂けませんか？」

「・・・こんな時間では どこも店じまいしていますでしょう」

「私の屋敷がすぐそこです 暖かいものを一杯だけ召し上がっていらつしゃいませんか」

屈託のない笑顔に誘われて 僕は素直に頷いてしまっていた

ほんの少し

仕事とは関係のない 誰かと話をしたかった

そう

誰かと話がしたかった

これは僕の言い訳だろうか

招かれた彼の屋敷は古びた昔ながらの民家だった

彼の用意してくれた暖かいものは 暖かいワインに甘い蜂蜜とレモンが添えられたものだった

身体の芯からぽかぽかと温まると同時に 不思議な高揚感に包まれた

「何か・・・特別な飲み物だったのでしょうか？」

僕の問いかけに 彼は艶然と微笑むと答えていった

「いいえ ただの暖かいワインですよ」と

疲れていた

終日の撮影は緊張の連続を強いられ 厳しい寒さとも闘ってきた

だから

正直 僕は疲れ切っていた

これも 僕の言い訳だろうか

だから

彼の手が僕の肩にそっと伸ばされた時

その暖かさに心がさわさわと揺れて

心地よいぬくもりを もっともっと心が騒いだ

それは 睡魔に手をとられる一瞬に似て 身体と心がきれいに切り離される一瞬

彼に抱き寄せられた時 僕の心は身体を離れていたのだと思う

その口づけは ほんのりと甘いワインの味がした

じんわりと麻痺したような感覚が 背筋にぞわりと走り抜けた

僕は青年の黒い瞳をただ見つめていた

瞳を閉じずに交わす口づけが

こんなにも官能的なものだとは知らなかった

置き去りにされた心はそのままに 口づけはいよいよ深くなった

僕は ただたまらなく心地よい感触に夢中になった

気が 遠くなった

その4

4・花屋敷

気がついた時

僕は宿の自室で布団にくるまっていた

窓の外は白々と夜明けの光で眩しかった

暖房の切れた室内は 空気がしんと冷たくて

布団から出た顔が凍ったように冷え切っていた

スタッフの声に応えながら布団から起き出した

昨夜 どうやって宿に戻り布団に潜り込んだのか一切の記憶がない
冷たい水で顔を洗うとようやく頭が少しすっきりとした

仲の良いスタッフに 昨夜自分はどやって戻ったか聞いてみた
スタッフは笑いながら 歩いて元気にお戻りでしたよ と言った
どうやら 僕が酔っぱらって宿に帰り着き 記憶を無くしたと思っ
たようだ

ささいな誤解を解きほぐすのも面倒で

僕も笑って そうだったつけと話を流れに任せてしまった

夢だったのだろうか？

星空の下 出逢った青年に誘われて 招かれた屋敷で甘い酒を飲んだ
そして

酒より更に甘い口づけに酔わされて

僕はあの後 どうしたのだろう

食欲がなかった

朝食はコーヒーだけ飲んで 何も食べなかった

普段から特に変わりのない事だ いつもこんなものだ
それなのに

周囲の人間は殊更に心配そうに言う

「大丈夫ですか？ 顔色・・・よくないみたいですよ 食欲ないんですか？」

「大丈夫ですよ いつも通りです」 笑って応えた
心配そうなスタッフが正直鬱陶しかった

撮影中は ただ目の前の課題をこなすことに必死だった
与えられたハードルをひとつずつ越えてゆくこと

少しでも前へ 少しでも上へ 少しでも先へ

僕は必死だった

かれこれ10年を迎えたこの仕事

正直 自分がこれ程に注目される立場に成り得るとは思っていなかった

このまま

さして注目も浴びず そこそこの役をそこそこにこなして
それなりの人気を得ながら過ごしてゆくのだろう
そんな風に思っていた

それが

初めて主演を得た連続ドラマで演じた役が当たり役となり

僕は世間でにわかに注目の俳優となった

「遅咲きの大輪」だの「持て余す美貌に姥皮」だのと言われたりも
した

はまり役と言われたキャラクターの個性を払拭する事にムキになった
ファンの数も驚くほどに増え 自分でも恐いほどに世間の注目を集
めた

CMのオファーも増え ドラマや映画も次々と決まっていた

ようやく 人気俳優と言われるメジャーに食い込んだ
それでも マイペースが僕の取り柄だ

だから 周囲がにわかには賑やかになった後も自分では
何ら変化はないものと思っていた
だが実際には 随分とハードな日々には忙殺される事となった
そんな中 必死で自分を見失わないように
それだけを思い過ごしてきた

演じること それは 常に新しい自分を創り出してゆくこと
僕は 自分でも気づかないうちに
そんな作業への没頭に 疲れ切ってしまったのかもしれない
だから

ほんの少し
現実から逃げ出したいと
心のどこかで思い詰めていたのかもしれない

都会にはない静けさと降り注ぐような星空のもと
僕は毎晩 宿への帰り道 あの青年の屋敷を訪ねるようになった
どこか現実感の薄れる真夜中という時間
そして同じく現実感を感じさせない美貌の青年
流れる時間がその軸をなくしてゆく空間
それが かの青年の住まう屋敷だった

僕は毎夜 かの屋敷の門をくぐった
そして翌朝には決まって必ずその記憶のほとんどを持たずに
ただ宿の自室で目を覚ますのだった
香しい百合の香りだけが記憶の片隅に残っている
そう

百合が沢山咲いていた 花屋敷の夜
あの屋敷で僕は一体どうやって 何をしてどんな時間を過ごしてい
たのだろうか
頼りない記憶の糸をたどる……

その5

5・雪女

その人は漆黒の艶髪と透き通る白い肌をしていた
その瞳は闇に煌めく黒い宝石のようだった

彼は僕の耳元で囁いた

「私に会った事を 誰にも話してはいけませんよ」
もちろん 誰にも話すつもりなどない

僕は彼の屋敷で過ごす時間の為に生きているとさえ思い始めていた
昼間の太陽が眩しすぎるのだ

夜空に輝く星たちの明かりが心地よい

僕は

千の星に抱かれるように彼の腕に抱かれた

「貴方の身体は甘い甘い蜜で満ちている

だから 私のようなものを引き寄せてしまふのですよ」

「・・・蜜？」

「貴方はご自分の魅力を全く判っていないのですね」

彼は僕をその腕に抱き寄せながら耳元で囁いた

耳朶に柔らかく齒を立てられて

全身の肌が粟立つようなぞわりとした快感が背中を走った

今日もまた

僕は一人歩いて宿へと戻る途中で彼の屋敷の門をくぐっていた

もうすっかりとその場所も

彼が僕をもてなしてくれる手順も覚えてしまった

初めて彼に会ってから

いったい何度この星空を見上げただろう

「冷たくてひんやりと吸い付くような肌が段々に淡い紅色に染まっ

ていく

そうしてそれはたまらなく情熱的に私の身体を煽るのですよ」

「……っはぁ……んっ……」

胸元をさぐる彼の手が 僕のささやかな突起を弾いた
背中を彼の胸に預ける形で抱き込まれた僕は

無防備な姿で着ている物を次々と剥ぎ取られてゆく

胸の突起を弄んでいた優しい指が

もうその刺激を待ちかねて頭をもたげている僕の昂ぶりへと辿られ
てゆく

「んっ……っふぁ……」

僕の口からは 自分のものとは思えない甘い吐息が吐き出される
その全てを捕らえられるような口づけに唇を塞がれて息がつまる

今の僕は今の僕

明日の朝 また目覚める僕は別の僕

私の耳は貝の殻 ただ潮騒を聴く そんな詩が頭をよぎった

今の僕の耳は一体何だ

彼の囁きと甘い睦言だけを期待に震えて待ち焦がれている

耳にそそがれ流れ込んでくる言葉と吐息たちに全身の力が失せてゆく

彼の手は 僕の身体を軽々とその重力から引き離す

ふわふわと心地よいおももちに意識が薄れてゆく

首筋にチリつと走るわずかな痛み

その跡を楽しむように強く噛み付くような口づけに肌が桜色に染まる

握りこまれた僕自身は彼の言う甘い蜜を流し

その先端をまるで愛しむようにかれの舌が這い蜜を舐め取ってゆく

チロチロと見え隠れする彼の舌は真っ赤に燃える炎のように紅い

その口腔に含まれた僕自身は激しく脈打ち

与えられる刺激に耐えきれず

噛み締めた唇から甘い甘い声が漏れる

「もつと聴かせて 貴方のその声を……」彼の言葉に胸の奥が
ずきりと疼く

与えられる刺激はそのまま耐え難い快感だ

僕の背は逃げるように強く反り返る

抱き戻され 引き戻される腰にまわされた彼の白い腕

何もかもが艶めかしくも妖しい魅力で僕を惑わす

男に抱かれるなんて

今まで どんなに執拗な誘いを受けても

脅迫まがいの口説きにも

甘い誘惑と報酬を提示された誘いでも

断固として首を縦にはふらなかった 片っ端からそれらの誘いを一
蹴した

僕は男に抱かれるつもりなど力ケラもなかった 考えもしなかった
誘われる事が不思議でなかった

まるで

この世界に「女性」という存在が一人たりとも存在しないかのように

僕 という存在に執着を見せる男達の胸の内が

どうにも理解できずにいた

鯉という生き物は普段メスしかない という話を彼がしてくれた

産卵の時期が近づくと メスの中の一匹がオスに変化するのだそうだ

さしづめ

僕はこの反対の立場なのか などと考えてしまう

オスの中からメスに変化した個体

それはオスたちを惹き付けてやまない何かを持っている

彼は 僕がそういった存在なのだと教えてくれた

僕に満ちている蜜について

彼が初めて 僕にちゃんと説明してくれた

そして その蜜はちゃんと舐め取ってやらないと

いつまでもその甘い香りを漂わせ続けてしまう

それは いつまでも男達を狂わせ迷わせ引き寄せてしまうのだと

「私に会ったこと 私にされたこと 私の言ったこと

どれひとつ 誰にも話してはなりません その時は貴方をもう帰せなくなる」

彼は真剣な瞳で僕を見つめた

「はっ・・・んん・・・」

彼の手に扱かれて僕の昂ぶりは白い飛沫を放つ

彼の唇がその白濁をチロチロと舐め取ってゆく

脱力した身体の全てを彼に委ね

僕は差し伸べられた睡魔の手をとった

その6

6・耳無し芳一

その類い希なる琵琶の演奏に

落ち武者どもの迷える魂をも引き寄せてしまった耳無し芳一

その怪談は語らずとも有名だろう

彼は僕の存在を芳一の琵琶に例えた

ただ耳を傾けずにはいられなかった芳一の琵琶の音色

「貴方の声は琵琶の音にも勝るとも劣らない 特に艶を含んだ吐息など・・・」

「んんっ・・・はあっ・・・あんっ・・・」

「存分に啼かせたくなる貴方の見事なこの肢体・・・」

「つく・・・うつ・・・」

「こうして 触れるだけで琴線が震えるような見事な音色が響く」

彼は 僕の身体に触れる

髪をすき 頬を撫で 唇をなぞり うなじに口づける

そしてその美しい指で僕の胸の尖りを弾き弄ぶ

僕は堪えきれず 自分の耳にも甘く響く喘ぎを零す

彼の手は 僕の昂ぶりを包み

彼の口づけで僕の昂ぶりは高みに登り詰めてはじける

密やかにその入り口を閉ざした蕾にも彼の指は辿り着く

「あっ・・・そ・・・そんなところ・・・や・・・やつ・・・んんっ・・・」

つつぷりと滑らかな何かに濡れた指先が 僕の蕾に押し入ってくる

柔らかな動きに解されて くちゆくちゅと淫猥な艶めいた音色が響く

存分に解されて挿入された彼の指が僕の内奥を探り

それ に狙いを定めて擦りあげられる

僕の腰は跳ねるように感じてしまう

生まれてこのかた 知らずに生きてきた愉悦の波にのまれる
幾度となく押し寄せる絶頂の快感に頭の中に白い靄がかかる

彼は

僕の吐き出す白い蜜を一滴残さず舐め取ってゆく

僕は彼の昂ぶりに触れたい衝動に駆られるが許されない

彼は 己の昂ぶりを慰める事をしない

ただ僕の蜜を貪欲に飲み干すだけ

そして僕は

存分に解された内奥に満たされる事のない疼きを残したまま放置さ
れる

もう 昂ぶりから熱を吐き出すだけでは満たされない

僕の身体は蓄を貫く力を欲しているのに

彼がそれを与えてくれる事はない

ただ 疲れ果てて乱れた姿を顧みる力さえ残っていない僕は眠りに
落ちる

そうしてまた その記憶のほとんどを手放して

朝日の眩しさに目を細めて目を覚ます

僕は

一体 どちらの時間に本当に生きているのだろうか

撮影は終盤を迎えていた

役作りの為 と言えば周囲の反応は少し友好的にかわった

僕の体重は随分と減っていた

それでも 鏡の中の自分は驚くほど艶やかに健やかに見える

自分でも気づく程に 何かが薄く僕を包んでいる

いうならそれはオスの中にまぎれた一匹のメスがふりまくフェロモ
ンのようなもの

肌はしつとりと艶を持ち 瞳は濡れたように潤んで淡い焦点が危う

い儚さを纏っている

そんな僕に 周囲の人間たちは遠巻きに ただ僕を見つめている
彼のように触れてくれたらいいのに
そんな勇氣は誰にもないのか

あれ程熱心に僕に執着を見せていたディレクターの男さえ

今では僕を眩しげに 頬を赤らめて見つめるだけだ

あからさまな誘いも 口説き文句の一つもない

今の僕はそれ程に妖しく淫猥な存在になり果てているというのだろ
うか

鏡の中に 何も見出す事はできない

僕は 答えを求めるように

今日もまた 星空の下 彼の屋敷を訪れる

「貴方の蜜が私を生かしてくれるのです 貴方の全てを飲み干した
い」

耳朶をねぶられて囁かれる彼の声に僕の身体は芯を失う

失った芯を補って欲しい

彼の熱くこごった熱棒で貫いて欲しい

求める僕をはぐらかすように彼はそのしなやかな指で僕を翻弄する

僕は啼かされ 躍らされ そして蜜を吐き出し 吸い取られる

僕が痩せてゆくのは

もしかして この毎夜の逢瀬のせいなのか

今更ながらの思いが胸によぎる

それでもよい

そんな思いもまたここにある

僕はもう 彼の指なしにいられない 彼の吐息とその甘い囁きに溺
れている

「・・・僕を 抱いてください・・・」

「私に・・・全てを差し出すというのですか？」

「・・・もう・・・もお・・・焦らさないでください・・・おねがい・・・です」

僕の消え入りそうな吐息混じりの嬌声に彼の目がキラリと光った

その7

7・雨月物語

現世の身これ一日に百里もゆかんこと 魂なれば千里の道をもゆく
という

離ればなれになった恋人を思い 囚われの身を嘆き自害する男

男は魂となり 愛しい者の元へと千里の道を駆ける

待つ身の者もまた 厭わしい距離を憎み 自らの命を絶つ

二人の魂は駆け寄りて交わり 溶け合い 後に一輪の水仙となりき

両人が男であつたという説も根強い物語

己の身体が紛れもない男のそれであることを 僕は自覚している
美しいと評される己の顔すら 鏡の中で紛れもない男のそれである
と思う

決して ただ細いばかりの身体でもない
それなのに

僕の身体から流れ出る蜜とその残り香は甘い乙女のものだと彼が言う

彼に抱き止められ その指に胸の突起を弾かれ

押しつぶすように揉み込まれると 膨らみのない両胸が疼くように
粟立つ

それは身体を中心へと全身の血を運び

僕の昂ぶりはその頭をもたげる

脈打つそれを彼は自分の昂ぶりとかさねてキスするように摺り合
わせる

「ひゃっ・・・あっ・・・」

初めて触れた彼の昂ぶりに 僕の腰は意志に反してイヤらしくうねる

一纏めにお互いの昂ぶりを彼はその手中に納め やわやわと扱きあ

げる

向かい合って抱き合った腹に二本の熱棒が白い先走りを零しながら
しなる

今日こそ彼と身体を繋ぐ

僕の溶け出す芯を彼の熱棒で埋めて欲しい

果てしない欲望が僕の身体を熱くする

今まで　どんな女性と抱き合っても感じる事のなかった愉悦に震える
そんな自分が不思議でもあり　ああこれが本当の自分なのだと感
じる

彼が欲しい　ただそれだけだった

「もう・・・もどれませんよ・・・それでも　本当にいいですね
？」

「はい・・・」

確かめるように僕の唇に口づけて　彼は僕の身体を一層深く抱き締
める

一纏めに扱かれた昂ぶりが　耐え難い快感にふるふると脈打ち

僕は一人　彼の腹に白い飛沫を吐き出してしまった

彼は指でそれをすくい取ると　全てをキレイに舐め取った

彼の瞳が銀色に煌めいた

ああ　常人ではない　現世にもどこにも存在し得ない人なのだと

僕ははじめて思い至った

彼が僕の腰を抱き直し　そっと濡れた指で後孔を探る

つぷりと差し込まれた彼の指に　ぴくりと腰がはねて逃げようとする
強く抱き戻されて　一層の刺激と異物感に僕の喉がつまり声が掠れる

「はっ・・・ああん・・・」

自分のものとは思えないような甘い嬌声が漏れる

彼の指が殊更に敏感な場所を探り出し

執拗にそこへと指が擦りつけられる

たまらない快感が全身をめぐり

一度はその全てを吐き出したかと萎えた僕の昂ぶりが
再びその頭をもたげる

片手で僕の昂ぶりをやわやわと扱きながら 彼の唇が後孔に触れる
「ひやつ……んっ……」

舐られる刺激と差し込まれた舌の動きに更なる快感が押し寄せる
指と舌で存分に解されたそこは

まるで乙女が己の蜜で熱棒を迎える準備を整えるように

彼の昂ぶりが押し入ってくるのを今かと待ちかまえ

ひくひくと褰が疼き蠢く

「力を 抜いていなさい」 耳元に囁かれ 腰が砕けたように力が
抜ける

押し当てられた 火傷しそうな熱に瞬間僕の心が怯えて震えた
しかし それが強い力で押し入ってくる感触に

全身で彼にしがみついた

「……つつ……う……っん」

痛みはすぐに快感に変わった

それは僕の知らない世界だった

目の前が白く霞んだ

貫かれて

僕は 繋ぎ止めていた意識を 手放した

その8

8・吸血鬼

僕は 奈良での仕事が続く限り 毎晩のように彼の屋敷へと通った
もはや 役作りのため という言い訳にも周囲は良い顔をしなくな
った

それ程に 僕はやせ衰え 頬はこけ あばらが透けて浮いて見える
程になっていた
それでも

不思議な事に 体調はすこぶるよく 僕は毎日が快適だった
撮影も順調にすすみ 僕は周囲の心配などまるで気にする事もなく
ただ 与えられた仕事を懸命にこなし
そして 自由になる夜の時間には

星空のもと 彼を訪ね そして抱かれた

吸血鬼 そんなものをふと思い出した

彼は僕の首筋に噛み付きもしなければ 血を吸い取る事もない
けれど

そのかわりに彼は 僕の吐き出す白濁を蜜のように舐め取る
そして僕の身体の最奥を貫き 熱いしぶきを僕に与える

腹の奥で弾けるように感じる彼の飛沫は僕に果てしない愉悦を与える
僕は幾度となく達し 彼はその全てを飲み干しちろちろと真っ赤な
舌で丁寧に舐め取る

僕の蜜が彼を生かしている そう彼は言った

僕の蜜を彼は必要としている

僕と身体を繋ぐ事で 彼は生かされていると そう彼は言った
彼は吸血鬼 僕の蜜を吸う

僕は彼に全てを差し出し 彼の与える快感の虜となりはてた

そして やせ細ってゆく代わりに 僕の中には濃縮された蜜が沸き
それは異性のみならず 男達をも発情させる芳香を放つ

僕の身体は そういうものになってしまった

彼に与えられる刺激なしには暮らせない そんな身体になってしま
った

僕もまた 彼によって生かされているといってもよいのだ
いずれ

僕の全てを吸い取った彼はどうなるのだろうか？

また その全てを吸い取られた僕はどうなってしまうのだろうか？
夜露のように 朝日に照らされてチリのように消えてなくなってい
まうのだろうか

それでもいい

そう思った

僕は恐ろしい現実と向き合う

撮影が この地での撮影の全てが終了してしまったのだ

あとは東京に戻り 全てをスタジオにて撮影しクランクアップとなる
もう

彼の屋敷に通う事ができなくなる

この恐ろしい事実には僕は愕然とした

彼から離れて暮らすなど もう 到底できるはずもない

僕はこの地での最期の夜

彼に懇願した

どうか どうか僕の全てを貴方のものにしてください

そうして 二度と離ればなれにならないように

僕を繋ぎ止めて あなたの一部にしてみてくださいと

彼は哀しげな微笑みをたたえて 静かに僕の頬を撫でた

逢瀬にも終わりはあるものです

貴方にとっても その方が良いのかもしれませんが

貴方はこのまま貴方の世界に戻ればよいのです

私の事はキレイに忘れて

元の貴方に戻るといい

そう言つて 彼は僕に哀しい口づけをした

重ねられた唇に 頬を伝つた涙が塩辛かつた

僕の涙だつた

イヤです 離れて暮らすなんてできっこない

貴方に抱かれて僕は生かされている

僕の蜜なしにあなただつて生きてはいけなはずでしょう

僕の懇願に彼はそつと僕を抱き締めて 柔らかな唇で僕の涙を拭き取つた

抱き締められて いつものように肌を合わせて抱き合つて

キスするようにお互いの昂ぶりを重ね合い擦り合わせて登り詰めた

僕の蜜を余さず舐め取り

彼は僕に囁いた

「この夜を限りにお別れです いつか 月のない星空の夜 迎えに行きます」
と

気怠い心地よさの中 夢心地で彼の声を聞いた

月のない星空の夜

僕はその言葉を胸に 東京へとその生活を戻した

その9

9・痩せてゆくという事

僕は東京で全ての撮影を終えた

やり遂げた達成感と高い評価を得た満足感で僕は一杯だった

もう 僕の体重が減ってゆく事はない

それは「役作りのため」という言い訳も終わりを告げ

周囲が期待する 元通りの僕 への帰還

もともと好き嫌いは多かったですし

食べられるモノを食べてます

ちゃんと食べてます 心配ないです

依然と変わらない返答をしながら ようやく自分でも食の細くなっ

た事を自覚した

これは恋煩いのようなものだ と そう思った

彼を思うと食事が喉を通らない

あれ程好きだった肉でさえ 食べたいと思えない

今はただ 彼に会いたいと そう思う

このまま元の自分に戻る事に抵抗さえ覚えていた

今のままの自分でいれば

彼がまた 迎えに来てくれるはず

僕は彼の為に生きているのだから

やせてゆく事 それは 彼と過ごした証のようなもの

月のない星空の夜に 迎えに行きます

そう彼は言った

だから

僕は今でも 毎晩夜空を見上げる

鏡の中の僕は陰りと嘆きを纏い 憂いに満ちた瞳が潤んでいる
疼く身体を持て余し 彼の指とあの熱を想う

そつと自分で触れてみる胸の突起は彼の指を思い出して桜色に染まる
つんと凝った先端が更なる刺激を待つて震える

昂ぶりは薄い茂みをしつとりと濡らす程に蜜を流し
ふるふると彼の口腔に包まれないと揺れる

己の手に慰められても それはただ虚しく白濁を吐くだけ

後孔の最奥に彼のものを迎えたいとその入り口はイヤらしく蠕動する
僕の指はそれを慰めようとゆるゆるとそこを探る

彼の昂ぶりの代わりを果たしてくれるものはない

彼以外の誰にも 代わりはできない

僕の身体は 彼だけを望み 恋い焦がれている

爛れた熱に焼かれるような淫らな快感に一人震えても
決して満たされる事はない

早く 早く

早く会いたい

彼に会って 彼の地で過ごした逢瀬の日々のように

強く 激しく彼の腕に抱かれない

僕の身体は彼の口づけを求めてざわざわと粟立ち震える

いつの日か

月のない星空の夜に

僕は彼に抱き止められて そのまま夜露となつて消えてなくなる
その日を恋い焦がれて待ち望んで 今 生きている

僕は やせてゆく事 すなわち 彼に僕の全ての蜜を与えることを
選んだ

僕は　いつかその全てを彼に捧げて消えてなくなる
それでいい

今　僕は毎日をただ彼を待ちながら生きている
月のない　星空の夜を待ち望んで

月のない星空の夜

10．かぐや姫

僕は人前に出るのが仕事だ

その姿を見られる事がすなわち仕事であり 僕の発するメッセージだ
僕は国内の各地を巡るイベントを精力的にこなした

なかば 自棄になって 彼を忘れようと仕事に没頭した

僕を好ましい俳優だと思って応援してくれる人達はありがたい
大切にしなければ と思う存在だ

僕を知っていてくれる 僕の知らない人々

不思議な事だ

僕は 名も知らない人々に支えられて生きている

俳優という存在は そういう人々の力無しには有り得ない
だから

心からの感謝を込めて 人々の前に僕は立つ

それでも

僕の何を知っていてくれるのだろうか

何も知りはない

ごく近しく在る人々にも 本当の僕は判らない

本当の僕

それは 今でも「彼」を想い すぐにでもかの屋敷へと飛んで行き
たいと願う

そんな僕を誰も知らない

平静を装って 日々を過ごしてみても

人々はいまだ「痩せてしまわれた事が心配です」と僕を励ます
励まされて 微笑んで ありがとうとその声に応え

僕はそれでもやせてゆく事を止める事ができない
そうでなければ

彼は迎えに来てはくれないのだから

僕という入れ物を好きだと言ってくれる人達

彼らは僕という存在の外側しか知らない

その外側の器が美しさを損ねていく事を 彼らはとても嫌う
僕という魂の入れ物

外側の器は 若くて 美しく 逞しく 魅惑的な そんな生き物

僕の魂は

そんな器を必要とはしていない

僕は解放される事を望んでいたのかもしれない
だから

彼という存在と出逢ってしまったのかもしれない

彼に遭いたいと 強く思う・・・

それは 梅雨も近いある日の事だった

日中 ささやかな雨が降った

濡れたアスファルトから湿った香りが立ち上った

その夜 満月のはずの月の姿は夜空になかった

薄雲に隠された満月は その明かりだけを地上に届けていた

薄雲の切れ目切れ目に 東京では珍しく

きらめく星たちの姿が見えた

僕はしばらくの間 自宅の屋上で夕日の写真を撮っていた

そのまま 落日を見送ると 満天の とはい難いながらも
東京では珍しい 星空をしげしげと眺めていた

誰もいないはずの自室から 背後に静かな足音が響いた
振り向けば

「迎えにきました」

そう言つて 微笑む彼の姿があつた

「待ちくたびれました」

「すみません」

「連れて行つてください」

「一緒に行きましょう」

「はい」

かぐや姫は満月の夜 見事に輝く月へと歸つて行つた

僕は今

彼に手をとられ 屋上のフェンスを越える

星空が迫る

ふわりと足元があやうくなり それは不思議な高揚感となる

僕は彼に伴われて

月のない星空へと溶ける

彼の腕に深く身を預けて

抱かれた心地よさに目を細め

もう

全てを捨て去る覚悟は出来ていた

僕もまた

明日から誰かの蜜をすすつて生きてゆく

吸血鬼に魅入られたものは吸血鬼になる

僕と彼

ふたり 彼の地で瘦せてゆく誰かを誘う

月のない星空の夜（後書き）

ねっとりしっとり？イヤらしく（爆）濃いめでした
ご堪能頂けましたでしょうか

感想・コメントなど頂戴できますと

今後の励みになります よろしくお願い致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0265e/>

怪談・痩せてゆく事

2010年10月29日01時35分発行